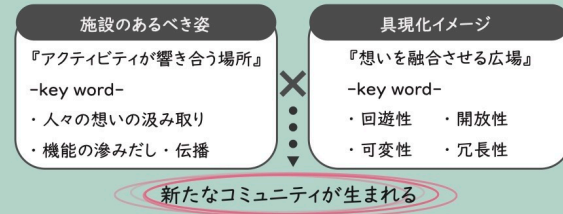


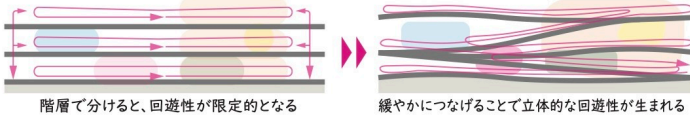
アクティビティが響き合い、新たなコミュニティが生まれる場所の創造

- 1 音楽ホールや中心部震災メモリアル拠点を中心とした様々な機能やアクティビティが響き合い、新たなコミュニティが生まれる複合文化施設とします
- 2 市民や利用者との対話を通じて「想い」を汲み取り、幅広く活用される施設をともに作りま
- 3 可変性や冗長性を有した自由度の高い空間計画とし、時代とともに変化し続ける建築とします
- 4 青葉山や広瀬川などの周辺景観と調和し、市民の憩いの場となるおらかな場所をつくりま



1-1. 様々な機能の響き合いで生まれる新たなコミュニティ

大・小の音楽ホールや練習室、中心部震災メモリアル拠点や展示室、カフェなどにおける様々なアクティビティ(行為・活動)の雰囲気や滲み出し、伝わり、互いに影響しあうことによって、新たなコミュニティ(交流)やイベント(出来事)の場が生まれます。また、施設全体に立体的な回遊性をもたせることで、交流の機会を促進します。そのような場所を積極的にデザインすることで、様々な機能が融合した文化複合施設となることを目指します。



1-2. 周辺施設との響き合い・伝播

このような施設全体の在り方が、駅の多目的スペースや、国際センター等の周辺施設、近隣の高校、大学の活動と響き合い、さらに各地音楽イベントや震災関連施設にも伝播することで、開業後も多様なコラボレーションが生まれることを期待しています。

- 例)
- ・定禅寺ジャズフェスとのコラボレーション
 - ・駅(多目的スペース)と音楽ホールのコラボ企画
 - ・震災メモリアル部門と3.11震災メモリアル交流館、周辺の震災遺構等とのコラボ企画
 - ・周辺の高校や大学と、まちの未来を考えるイベント
 - ・広場で子どもに伝える震災の記憶と音楽の復興力



設計を進めるうえで特に留意すること 良い施設・環境を「ともに作る」プロジェクトネットワーク

ホール計画経験者をチーム内に配置し、外構、什器、照明、サイン、舞台装置等の協力者とも協働しながら、最高の施設を作り上げる体制で設計を行います。また、発注者様と連携し、市民向けの説明会やワークショップを設計の進捗に合わせて行うことで、段階ごとの重要トピック(テーマ)について議論を深め、より良い施設・環境を、市民の皆様とともに作り上げていきます。このような取り組みにより、開業後も時代に合わせて変化し続け、長く愛される施設となります。

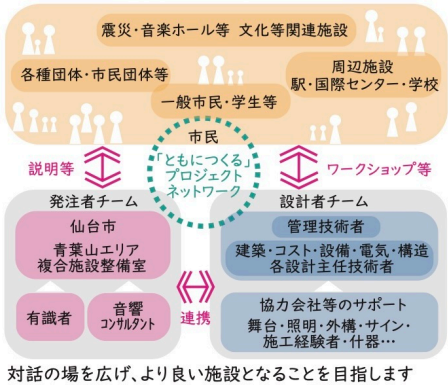
模型やBIMモデルによるスムーズな説明・意思決定

各段階において模型やパース、BIMモデル等を使用し、計画内容をビジュアルで表示することで、打合せやワークショップ等での説明や意思決定が円滑に行われるよう留意します。

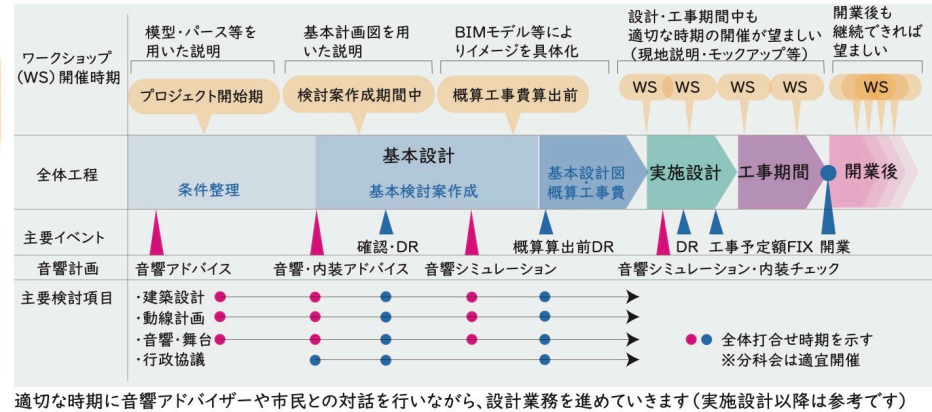


過去物件におけるワークショップの様子

「ともに作る」プロジェクト体制のイメージ



対話の場を広げ、より良い施設となることを目指します



適切な時期に音響アドバイザーや市民との対話を行いながら、設計業務を進めていきます(実施設計以降は参考です)

2. 市民や利用者との対話を大切にする

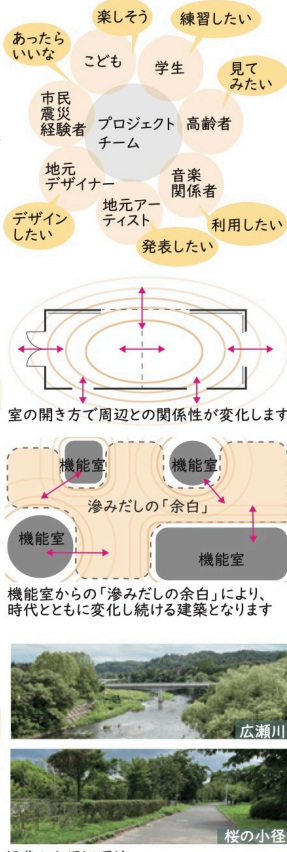
プロジェクト関係者間の調整はもちろんのこと、その枠を超えた音楽・震災体験者へのヒアリングや、誰もが参加可能なワークショップを開催することで、市民や利用者との対話し、この場所や建物への「想い」を汲み取り、計画に反映していきたいと考えています。

3. 機能配置の工夫

多用途に転換可能な諸室は、その配置を工夫することによって、固定された使われ方から解放され、使う人によって様な空間や場所が生まれ、諸室の稼働率も上がります。また、各機能を完全に閉じるのではなく、可変性のあるしつらえ(開く、可動式)とすることで、様々な使われ方が想定され、計画自由度の高いプランとなります。機能室の周囲に適度な「滲みだしの余白」を設けることで、計画自由度が高く、時代とともに変化し続ける冗長性の高い建築となります。

4. 周辺景観との調和

仙台市の代表的な自然景観である広瀬川流域や青葉山、桜の小径など、木々に覆われた緑豊かな景観と調和するように、ボリュームを抑えた外観とします。また、周辺施設からのアプローチをスムーズにすることで内外の動線が繋がり、自然と市民が集い、憩いの場となる、おらかな環境を作り出します。



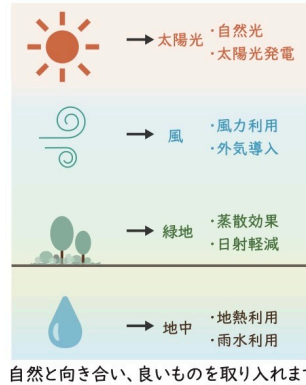
持続可能な社会を目指すSDGsの理念に基づき、下記の項目に留意します

- <環境対策> 日射等の熱対策を行いながら、周囲の自然と向き合い、良いものを取り入れる姿勢で設計を行います。それにより、自然と共生・調和した、サステナブルな建築を目指します。
- <地産地消> ホールやメモリアル施設の内装等に地場産材(みやぎ材等)や、県産の石材(伊達冠石、御影石)などの使用を検討し、地産地消を意識した材料選定を行います。
- <ユニバーサルデザイン> だれもが快適に利用できる施設とするため、多機能トイレや授乳室などを充実させ、スロープやEV等の移動円滑化に配慮します。



地場産材を使うことで、地元を知るきっかけづくりにもなります

環境配慮の考え方



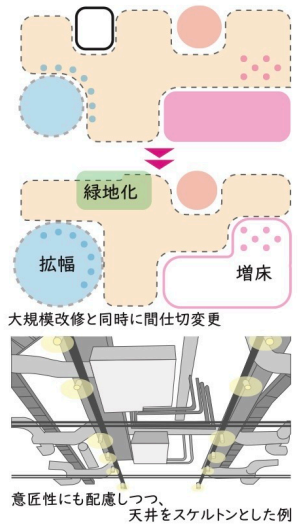
自然と向き合い、良いものを取り入れます

| | | |
|------|-----------------|--|
| 基本方針 | コストバランス | 建物全体において、意匠性を重視する部分や舞台機構、管理等の機能上・運営効率上重要な部分に優先的にコスト配分を行い、バックヤードなどの意匠性を重視しない部分や機能性を求めない設備は簡素化するなどのメリハリをつけ、コスト管理者によるチェックを行いながら、常にコストバランスを意識した計画を行います。 |
| 意匠 | ユニット化規格品・汎用品の採用 | 一部の構造部材や仕上材、舞台関連資材においての規格品を採用することにより、検討・製作期間の短縮化をはかります。これによりコストを抑え、設計・施工の監理もしやすくなり、計画全体の効率化に寄与します。 |
| 意匠 | 内装材の省略・簡略化 | 天井材等の一部を無仕上(スケルトン)とすることでコスト削減を図ります。また天井仕上げがないことで日常的なメンテナンス性が向上し維持管理がしやすく改修にも対応しやすい建物となります。 |
| 構造 | 合理的な構造計画 | 鉄骨造を主体とした合理的な構造計画とするとともに、構造部材の簡略化を図ることで経済設計を行います。また、大ホールのフライタワーや舞台下部空間を確保するために地下掘削が必要と考えていますが、その範囲を可能な限り少なくすることや基礎形状をスリム化することで、コスト削減を図ります。 |
| 設備 | エネルギーコストの削減 | 建物の断熱性や日射遮蔽性を高め、熱負荷低減をはかると共に、中間期には広瀬川からの心地よい風を取り入れ循環させることにより、四季を通じてエネルギーコストを抑えます。また、インシャルコストとランニングコストの比較を行いながら、太陽光や雨水集水設備等の自然利用を検討し導入することで、トータルコストの削減をはかります。 |
| 施工ほか | 施工経験の活用 | 設計段階で施工経験者へヒアリングを行うことができれば、施工計画や工期短縮などの技術的な知見を計画に活かし、建設コストを抑えることができます。 |

将来の大規模改修を想定した設計上の配慮

フレキシビリティに富んだプランニング

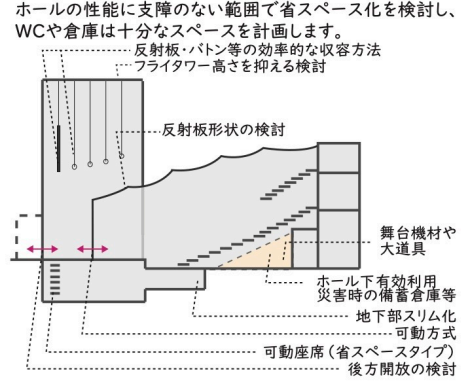
構造コアとスラブを主とした建築構成により、防火区画コア部以外の壁位置が自由に変更でき、将来の増改築等にフレキシブルに対応可能なプランニングとします。また、一部の壁を可動式としたり閉鎖・開放することにより自由度の高い運用が可能な部屋を設けたり、カーテン等での簡易な仕切を部分的に採用することで、日常的な改修が可能な、自由度の高い計画とします。



スケルトン天井による、将来の設備更新への対応

主に後方室の天井は露出(スケルトン)とし、将来の設備更新に対応します。また、後方室以外の共用部等においても、意匠性に配慮しながら、部分的なスケルトン天井の採用を検討します。それにより、設備系統の不具合の早期発見や、日常のメンテナンス性の向上を図ることができます。

ホール設計の考え方



面積表

| | |
|---------|---------|
| 4F: | 7,220 |
| 3F: | 8,480 |
| 2F: | 870 |
| 1F: | 9,220 |
| B1F: | 5,330 |
| 計 | 31,120㎡ |
| ※駐車場含まず | |